

感心した。ただ、第三句「……から」は、『サラダ記念日』がポピュラーにした文体なので、できれば避けたかった。

写生する人去りてしまへば男鹿を指す鷗とわれと海
波の音
松本ちよこ

男鹿半島近くの海岸らしい。波音が聞こえる広大な風景のなかの一人。有名な伊藤左千夫の九十九里浜の歌を思い出す。ただ第二句の字余りが気にかかる。「写生する人去りしかば」「……人去りてより」「……人は去りたり」等、改案は多くある。また「海波」はいかが。

文明がリセットされる時のためテトラポッドに君の
名を彫る
屋良健一郎

上句、なんとなく「猿の惑星」の最後の場面を連想させられた。私の記憶は不確かだが、映画の最後に、砂に埋もれたテトラポッドと自由の女神が出てきたのではなかったか。

猛暑日の判断ミスかごきぶりが自ら入りゆくごきぶり
り捕り器
本川みや子

短歌には珍しいブラックユーモア。こういう歌がもつとあってもいい。作者が考えたのはたぶん一匹のイメージなのだろうが、読者は複数のごきぶりがごきぶり捕り器に向かってゆくまぼろしを目にうかべる。

見送って半年の秋 空席は空席のまま星が照らすよ
笹本碧

具体的なある人との別れがうたわれているのだろうか、

別れそのものよりも、漠然とした今の空白感が浮かびあがる。半年前の春ごろからずっと空席のままの席がある。ついつい心がそこに向かってしまう感覚。分かるような気がする。

をりをりに我にさからふ少年の面の確かさ速さ鋭さ

山口明子

「面」は「めん」と読む。この歌の下旬は剣道の打ち込みのことらしい。教員として、部員たちと剣道をしている場面。ふだんの教室での関係が剣さばきに反映している感覚らしい。反抗期の少年の心身の起伏をうたう作と読む。

静けさに寄り添ひながら読み耽る『燈火節』には
月光つきかげ似合ふ
雪野真菰

『燈火節』は「心の花」の先輩・片山廣子の隨筆集。名作の評判が高く、今でも多くの人に愛読されている一冊。「静けさに寄り添ひながら読み耽る」は、同書にふさわしい表現と見るが、結句はいかが。いかにもそれらしくきれいにまとめてしまった感じがするが、いかが。

下庭の大き文旦に背伸びしてさわって歌に詠みたる
生徒
松井千也子

旧信綱宅・熱海の凌寒荘に、二十二人の地元の小學生がやって来て短歌を作ったらしい。そのときの一人をクローズアップしての一首。「下庭」は一メートルほどの段差がある庭の一部。「背伸びしてさわって」という具体的描写がポイント。